

# 幼児の発達と保育

《教育内容に關聯して》

津 守 真

従来から幼児の発達と保育に關しては、多くのことが云われているが、私がここで考えようとするのは、保育の實際に取り扱う内容と、発達心理学などで云われる発達とを、いかに結びつけていくかということである。

## 一、発達心理学と保育との關係。

過去二、三十年の間に発達心理学、児童心理学は極めて盛になり、多くの科学的研究が發表された。そして、最初は教育的な關心をもって出發した学問も、次第に時が進み、諸々の学問が専門化するとともに、この分野もまた、一つの専門分野を形作り、精確を極めた資料が積み重ねられ、特別に訓練された研究者を必要とするようになったのである。こうして児童心理学が専門家にな

くては追いついてゆけないような特殊分野になってしまったところに、教育の實際において児童心理学の知識や研究が強調されながら、教育の現場において容易にそれをなし得ないという悩みが出て来たのである。幼児教育、保育においても、この問題にぶつかって、どのように解決してゆくかが問題である。

先づ第一に、専門の児童心理学の研究から導びき出された研究の諸結果が教育の上に応用されることが必要である。それは専門的児童心理学研究を現場において行なうというのではなくて、専門家の手になる綿密な検討を経た研究の結果を綜合して、教育的な視野からとりいれることである。このような意味で、私どもは専門的分野と教育の現場とを結びつけ關聯つけてゆく努力を必要とするし、又それによって斯界に知識を加えることができるかと考

える。

第二に、児童心理学は極めて専門化し、技術的に進歩したけれども、その研究的態度は教育の現場における態度と共通のものをもつことである。即ち、児童心理学の研究において極めて重要なことは、児童の行動を客観的に観察し、現象をありのままにとらえることである。教育の実際においても、個々の子どもをよくみつめ、観察し、その上に教育を展開することが要求される。この実際の子どもをよく見て、ありのままの姿を捉えるということにおいて、研究も教育も共通点をもつ。研究においては、そこから進んで一般的法則を見出すことが目的になるが、教育においては、そこから進んで個々の子どもの問題を解決することが関心の中心となる。その意味で、教育の現場は、毎日毎日が研究である。幼児教育においても、このような教育の現場から出てきて、教育と直接に関係のあるような研究がもっとと生れて良い筈だと思う。

発達というと、普通に考えることは、何才になるとどういふことが出来るというような、平均的な能力というようなものが考えられやすいが、何才児では何々ができる、というようなことは一般的、平均的であって、実際の個々の子どもと照してみるとは一つの点に関しても、実際の子どもはいろいろ違っていることを発見する。教育で問題になることはむしろ実際の子どもの状

態を把握して、それをもっと良い方向にむけてゆくのはどうしたらよいかという工夫にあるだろう。子どもを理解せねばならぬと云われるが、保育においては、それは単に一般的な子どもを理解するのみでなく、実際の子どもの一人一人を理解することが必要なものであり、その上に教育を展開することが必要なのである。子どもが遊んでいる所をじっとみてみると、その子どもが、今何をしようとしているのか、どういう気持ちでいるのか、何に興味をもっているのか、何が出来るのか、などを発見する。何十人もの子どもが毎日展開してゆく生活から、私どもは何十もの発見をする。

その発見の上に教育は展開されるのであろう。そしてその中で、児童心理学の研究の成果を応用し、或いは適用してゆくことも必要になるであらう。

二、幼児の教育内容においては、内容そのものよりも、幼児の生活態度が強調されるべきであること。

毎日幼児を扱ってゆく際に、そこで我々は何をしていたらよいであらうか。ここで「何」ということ、即ち教育の内容といふことが問題になる。「何」というと、例えば理科では主な昆虫や植物の種類を、算数では暦がよめるようになるまで、社会では交通規則を守ることを、製作では何々が出来るまでなどという

風に、教える内容を、或いは覚えてほしい内容を規定してゆくというように考え易い。小学校の教科内容を一段下げたものとして考える向きもある。しかし、子どもの年令が小さい程、教えられる内容そのものの重要性は減じて、むしろ、子どもが周囲の世界周囲の社会に接して、取り組んでゆく仕方、いかに打ちこんで一つの活動に従事するか、いかに工夫して物事を処理するか、いかに他人と協調してやってゆくかというような、いわば基本的な生活態度の方が、より重要である。

そしてその場合には、とり上げられる内容そのものは、そこで養なわれる基本的態度のための材料であって、そこで「何」をやるかというよりも、「いかに」取りくんでやるかというこの方が重要になってくるのである。

例えば、積木で門と自動車の車庫を作るとする。ここで内容を問題にすれば、門の構造や、いろいろの門のあることを学ぶ、或いは車庫の構造や機能を学ぶということになるが、保育においては、単にそれだけでなく、積木を組み立てながら、そこでどれだけ目的にかなったものを作ろうとしているか、どれだけ工夫しているか、いかに多勢の子どもが力をあわせて一つのものを作ることができるといふような点をもっと重要になってくる。

或いは、果物屋をしたり、釣堀をしたりする場合、それによつて果物の形体や植物的性質を学び、或いは魚の形態を学ぶとい

うこともあるが、むしろ、そこで皆と一緒に遊ぶこと、一つの目的のためにいろいろのものを作ること、皆と力を合わせて一つのものを作ること、全身を打ちこんだ活動をすること、そしてそれを通していろいろのものに興味と関心をもつこと、というようなことが、教育の中心となり、それが果物屋によろうと、時計屋によろうと、構わないわけである。

勿論このような態度は、抽象的に養なわれるものではなく、具体的な課題を通して学ばれるものであって、その意味で課題の内容自体も重要になってくるのであるが、更に又、このような態度もまた、年令とともに発達するものであって、いろいろの材料、いろいろの課題を通して、繰返し訓練され、学ばなければならぬものである。

組全体の子ども、或いは個々の子どもをよく観察して、そこで子どもたちが現在どのような発達の状態にいるかを見、更にもどの点をどういう風におし進めてゆくことが必要かを察して、そのために、どういう材料、どういう課題をとり上げてゆくことが適切かを考えてやってゆくことが、具体的場面に当つての教育内容の問題点になってくるのであろう。